

卷 頭 の 言 葉

魚の子は多けれど

魚の子は多けれども魚となるは少く、アシラ樹の花は多く咲けども果になるは少し。人もまたかくの如し、菩提心をおこす人は多けれども退せずして、まことの道に入る者は少し。

建治一年、日蓮聖人・松野殿御返事

世の多くの人々は、人生の憂悲苦惱によつて信仰に入ります。然しその殆どの人は、無明煩惱より派生した信仰か、対症療法的信仰に留まつてしまつて、憂悲苦惱の根源である無明煩惱を、そのまま菩提に転ぜしめる抜本的信仰、いわゆる仏知見の道そのものゝ信仰を求める者は少く、その道に入る者は更に稀です。日蓮宗の人でさえ、いさという時には臆してしまい、尤もらしい理由をつけて退転する者が殆どです。蓋し本来お題目は本仏釈尊の仏知見そのものなのですから、自分に焦点をあたえず、焦点を本仏釈尊にあわせて信仰する時、死をかけても退くことのない仏知見の道の中に入つて、自己の尊嚴を発見することが出来るものです。

白象



# 鷲峰—6月号増大号—目次

第2巻・第6号・通巻第12号

卷頭の言葉 魚の子は多けれど…… 1

---

拝啓鷲峰読者様 ..... 花房 敏 2

---

熊本・身延山鼓唱題行脚紀行	
おのれに打ち勝つもの	16
熊本から福山へ	17
福山から身延山へ	45
身延山旧蹟醒悟園本妙庵	
法燈継承の挨拶	74

---

教説説明・誓願なき人生	15
身延山青年行学講習会案内	69
地震見舞・暑中見舞廣告案内	72
読者へお願い	73
編集後記	77

---

表紙題字・身延山法主藤井日静貌下

表紙写真・インド靈鷲山へ渡る身延山金銅の釈尊像

表紙印刷・大阪東洋印刷社々長・藤原秀憲氏寄進

カット・身延山みのぶ教報提供

# 样 者 讀 峰 驚 啓 拝



甲南大学卒業

毅 房 花

一九六四年、それは東京五輪に明け、東京五輪に暮れる年です。

オリンピックのために、何もかも後廻わにして道路をつくり、オリンピックのためにホテルを完備し、オリンピックのために風紀取締りに眼を血走らせ、オリンピックのために・・・・・・・

人々はオリンピックの歌をうたい、外国语に首っびきとなり、実況中継のために巨額の金をつぎ込んで、新しい通信衛星を打ち上げることとなりました。

猫もシャクシもオリンピック—ズンとほゝえましい今日この頃の日本ではあります。

ところで万民必見という、このオリンピ

タを「見たい」と思つても、見ることの出来ない人々が大勢いることを、はたして何人の人々が、関心もつてゐるのでしょか。

辯慶 総理大臣様 あなたは御存知なのでですか？

## 2

鶯峰誌御愛読の同志青年の皆さま

僕たちは何のために、お題目を唱えているのでしようか。

何のために、信仰しているのでしょうか。

信仰とは一体、何なのでしょうか。

お題目とは一体、何なのでしょうか。

「私は、お題目のおかげで、事業に大成功

することができました。本当に法華経は有難いものです」

「私は、日蓮宗の信仰をしてゐるおかげで事故にあった時でも、奇跡的にカスリ傷一つ負わず、却って、全く関係もない所にいた創価学会の者が、事故のトバツチリを受けて、即死しました。やはり私の信仰が正しい証拠です。有難いことです」

「大聖人に信を入れ、法華経を信仰してゐるおかげで今場所、優勝できました。有難や」

「お題目を唱え出してから、勉強がよく出来るようになつた。お題目は有難いものですね」

「信心のおかけで、芸の道が開きました。

このきびしい芸の道において、お題目の有難さを身にしみて感じました」

こんな言葉を、今までに数知れず聞かされてきました。そしてそのたびに、変な気持になつたものでした。僕には、

△このような信仰は、一仏乘とは、何の関係もない

3

としか思えなかつたからです。たとえを  
きけると、お題目を唱えだしてから、急に  
勉強が出来るようになつたといつ一学生に  
対して、あえてお聞きしてみたいと思いま  
す。

「あなたは、今まで成績が悪かったそうですが、信仰するようになる以前に、  
僕は何が何でも、学校で一番になつてみせる。たとえ血ヘドを吐くとも、一番にならずにおくものか」

「 という発奮がござりましたか。そしてその  
発奮による、一大決意を裏づけるところの  
他人の数倍もの努力がありましたか」

僕たちは、何か大事なことを忘れてはいるのではないか。しょーか・・・・・。

お釈迦さまは、何一つ不自由、不満のない王子の地位を捨ててまで、苦しむ民衆救済の道を求めて行かれました。

今此三界

皆是我有

其日衆生  
者の中の衆生れ

而今此處 しかも今この處は

多諸患難 もろもろの患難多し

唯我一人　たゞ我れ一人のみ

と、大慈悲心を起して、敵にも味方に

平等に吾が子と慈愛し、守護、救濟せ

んと酸念する、最高の大人格者となられました。

日蓮聖人は鎌倉時代の、あの天変地妖に苦しみあえぐ人々の姿をまのあたりにして既成仏教に疑問をいたくことから出発して正法によるが故に、

「我れ日本の柱とならん…………」  
と轟子吼し、

「一切衆生の一切の苦を受くるは、悉くこれ日蓮一人の苦なり」

という大慈悲心を持たれたのです。

インド独立の父マハトマ・ガンジーの心そのままを歌つたのが、

我れ天上の榮華を求めず

また地上の王位をも求めず

ただ苦しむ民衆の中にあって

民衆を救わんと願うばかりなり

という古代インドの聖典ベガヴァン・ギータの一節でした。

僕たちは、今あらためて、目をあツと見開いて、現実を大きく見つめねばなりません。シッカリと、大きく目を開くのです。

その目にうつるのは何でしようか。誰も彼もが、ツイテかり見逃していくものがないでしようか。

良識ある人の目には、六道にみちあふれるばかりに苦しみうごめく民衆の姿があるやかに映つて来ることでしょう。

日本全民族に代って原爆の洗礼を一身にあびた広島・長崎の人々。

大牟田三川坑の大爆発によつて一家の支柱を失い、家族離散の後、一家心中してしまつた人々。

世の中から通行を遮断された患者。

色眼鏡を通してしか見られない黒人や部

落民、そして第三国人の人々。

いな更に恐るべきことは、人間であることを自覚出来ぬ精神病者。

或は生れながらの不具者や、生れて間もなく体の一部を、或は半身、故は全身を失つた、いな、たゞ息をしているだけという小児マヒの子供たち……。

一方 五輪々々と馬鹿さわぎする人たちの顔、お題目を唱えて自分の都合が良くなつたからという理由だけで、有難がつてゐる人たちの顔、顔、顔……。

僕は、こんな時、何時も宮沢賢治のはらわたをしほるような祈りを思い起すのです。

「雨ニモマケズ」の詩篇の一節

ヒデリノトキハナミダラナガシ

サムサノナツタオロオロアルキ

このわざか一行に込められた賢治の心……。

賢治の故郷東北の農村は、しばしば旱魃におそれ、夏にも北海の寒波によって、農作物は、全滅に瀕するといふことが、再三のことではありますでした。農民たちは、飢えのあまり、子供を売るといふ地獄さながらの絵図でした。

その生地獄の中にあって、農民を救わんとしても、何一つ出来ない病める身に、たゞ涙をボロボロ流し、身をねじってオロオロする以外、なすすべもなかつた賢治、ものはや己れの菲力を、仏天に懺悔勧懲して祈るほかはなかつた、阿修羅の如き賢治の姿が、この二行の詩辺から浮んで來るのです。

何とすさまじいばかり崇高な賢治の姿でしよう。そして僕たちもまた、大きく目を

開いて、今日の世相を見る時、賢治のギリ

ギリするような、この祈りが、勃然として  
我が魂の奥底より、湧き沸って来なければ  
ならないのではないでしょか。

#### 4

同志青年の皆さま、

同じ人間に生れながら、世の中には、救  
いなき、おわくな人々が、何故かくまでも  
多いのでしょうか。

前述のような残酷な試練を、何故、多く  
の人々が与えられるのでしょうか。  
彼等が一体、何をしたというのでしょうか。  
どんな罪を犯したというのでしょうか。

三界火宅の娑婆世界、その中にあって六  
道に輪廻し、苦惱闘乱する人々の身の上を、  
見たり聞いたりするにつり、思い起される(

とは、

「我れ天上の榮華を求めず……」

と、おのれの立場を全く考えようとすら  
せず、苦しむ民衆の中に飛び込み、民衆と  
共に苦しみ、民衆の苦悩を、我れと我が身  
に背負って行ったマハトマ・ガンジーのこ  
と。

そしてフツフツとして僕たちの脳裏に迫  
って来るのは、

大願を立てん。

日本國の位を譲らん、

法華經を捨て、

觀經等について後生を期せよ。

父母の頭をはねん、

念佛申さば。

など種々の大難出来すとも、  
智者に我が義破られずば、

用いじとなり。

そのほかの大難、

風の前の塵なるべし。

我れ日本の柱とならん、

我れ日本の眼目とならん、

我れ日本の大船とならん、

と、日本全土の誇法の罪を一身に背負い、  
全國民に代って、本仏に懺悔懲薦して行か  
れた日蓮大聖人のこと。。。。。

僕たち日蓮門下の青年は、今こそ眞の戦  
争解脱、恒久平和の根源を思い知らねばな  
りません。そして第二のガンチーとなり、

日蓮大聖人につゞく本化地漏の菩薩の一分  
として立ち上らねばなりません。

大聖人は、人々が死んでから「我此土安  
穩天人常充满」の極楽世界へ送りとどける  
役で、世に出現されたではありません。

「大火所焼」「三界火宅」の、この娑婆世  
界にこそ、「我此土安穩天人常充满」の通  
一仏土を実現しようとされたのです。

そしてその肝要を著して「立正安國論」  
という一巻の未來記に創り上げられたので  
す。則ち日蓮大聖人の主張によれば、天下  
萬民の諸乘が、悉く一仏乗となつた時、は  
じめて吹く風、枝をならさず、雨つちくれ  
をも、くだかぬ義農の世界が、現前して來  
るのです。

大聖人が、開顕宣佈されたお題目とは、  
「本仏釈尊の因行果徳の一法」であるお題  
目であります。本仏一人より発せられたる唯仏  
与仏のサン然たる大功德体のお題目、敵に  
も味方にも、信する者、誇る者、そしてそ

の両者をも、共に救済せんと悲願されたる、  
本仏釈尊の絶対能動の大光明お題目、  
僕たちは、このお題目のサン然たる大光  
明に照される時、その光明体の中にあるて  
これをたゞたゞたゞ絶対受動するほか  
はないのです。

そして絶対受動されたお題目は、これを  
無心に信受する者を通して、再びそのまゝ  
本仏絶対能動の大光明として、隣人にも、  
かのあわれなる人々にも、先祖の靈にも、  
そして鬼哭愁々として六道にさまよう法界  
の万靈にも、回向されて行くのです。

同志青年の皆さま、

僕たち一人一人がやるのです。一人一人  
が、一人一人に如来の正法、本仏釈尊のお  
題目を伝えて行くのです。そして眞の平和  
世界を顯現させるのです。

眞の平和世界とは、正法宣布によつて、  
この娑婆世界をそのまま淨仏國土とするこ  
とです。かのあわれなる人々は、その時は  
じめて救わられて行くのです。

これから夏がやつて来る。あゝ暑い。暑  
さにつけても思われるのは、灼熱地獄にあ  
るぐ法界の精靈のこと。そして原水爆の灼  
熱をあびて今も苦しむ被爆者と、その子孫  
の身の上。更には、また再び、その一の舞  
いをふまんとする現代の人々のこと……。  
暑さに湯煙りをあげてゐるような、イダ  
ケダカな魔の兵衆、創価学会——意識する  
しないにかゝわらず、第一のナチス、ドイ  
ツを夢みる恐るべき狂団。

久遠の本仏を知らず、小手先きの平和論  
をありかざして政治進出をたくらむ生長の  
家——彼等が本尊とあがめる神は、久遠の

本仏教尊に、未だ帰依しない時の、梵天アラファンの如きもの。

そのような人々が死んだ後、その靈は鬼神となって、再びこの世に禍いを及ぼし、かのあわれな人々の姿は、決して後をたゝないのであります。

いな彼等自身、いかに氣づかないとはいひえ、阿鼻大城の苦しみをせねばならないとは、何とあわれなことなのでしょう。

## 6

同志青年の皆さま、

僕たちは、青年会を組織して、リクリエ

イションなどに浮かれているような時ではないのです。お題目を唱えて、頭が良くなつたの、事故で無傷だったの、金がもうかつたの、等と有難がつてゐる時でもないのです。

です。いわんや日蓮大聖人の受難を売りものにして、チンドン屋のマネをしているではありません。

さりとて、

「念佛無間、梵天魔、真言亡國、律國賊」と雄叫びながら、イダケダカになつてばかりいてもなりません。僕たちは大聖人のこの四個格言による折伏の、眞の思想を受けつけねばならないのです。

大聖人は、眞言を亡國と折伏されながらも、図顯された御真蹟大マンダラの中には金剛界、胎藏界、両部の大日如来を勸誦されてゐるのであります。

また念佛無間と折伏されながらも、最大一とされた法華經の、藥王菩薩本事品の中には、阿弥陀如来のことが説かれてゐるのです。

こゝに法華經に一貫する「開会の思想」があります。大聖人の折伏は、この開会思想にもとづく、攝取統一的なものであつて決して排他的、独善的なものではなかつたのです。僕たちもまた、この開会の思想を逸してはなりません。

供養の仏事では、施餌鬼供養が最も尊いものとされています。写書したお題目を川に流すのです。

そして、この供養をもって、かのあわれな人々の上ださまよつてゐる、無縫一切の靈の成仏をも、祈らうではありませんか。

#### 第二には街頭華嚴宣令です。

釈尊四十余年の伝道は、常に中印度大陸を、隅なく遊行する中に展開されており、日蓮大聖人の開教伝道も、常に街頭での獅子吼であり、インド独立運動の父ガンディー翁も、常に民衆の中の行脚に終始しています。

あえて先祖の靈や、有縁の精靈の成仏を祈つて、但信口唱すると共に、更にお題目を写経して供養するという仏事を、毎月実行しようではありませんか。

我々もまた、それに統ぐのです。宮沢賢治の、あの悲痛きわみなき、ギリギリするような祈りをもつて、法界の方靈に向向しすべての人々の心田に、お題目の大宝書が

建立されることを祈りつゝ、釋迦宣命しよ  
うではありますか。

同志として誰一人いなくとも、まず汝一人、我れ一人が決起しなければなりません。たとえ一人であっても、一人が一人へ伝え  
るお題目が、まこと如來の正法であり、本  
仏教尊の功德体そのものである限り、法華  
經の經文の通り、お題目そのものが、五十  
転展隨喜の功德を普遍して行くことによ  
う。

立正平和者は、如何に世に多くとも、そ  
の一人一人が、他に依存することなく、全  
身全靈をあげ、全責任を自己一身に背負う  
ほどの使命感をもって、目的を遂行して行  
かなければなりません。たとえば

「立正世界平和は、鷲峰誌を發行している  
鷲峰会青年僧と、鷲峰誌を愛読している  
我我在家青年の双肩にかゝっている」

と言つても、決して過言ではなく、自負  
しても、決して過信ではないのです。また、  
それほどの責任感と使命感がなくして、どう  
して、これほどの至難な大業を、貫徹す  
ることが出来ましょ。

立正世界平和を願う人々は、決して少く

はありません。さりとて、そういう人々に  
事をまかせてしまって、自分自身の実践を  
おろそかにするようなことがあってはなら  
ないのです。

鷲峰会青年僧の方々には、インドの靈鷲  
山を再興し、靈鷲山と身延山とをお題目で  
結び、本仏教尊——本化上行日蓮大聖人——  
そして地涌千界の一分としての世界人とい

う、本化地涌の菩薩の血脈を確証して頂き、これを基点として一天四海皆帰妙法実現のため、海外へ一国一人、一人一人渡って頂く天業があります。

また我々鶴峰愛説の在家青年には、在家の立場として、一都一人、乃至は一村一人本化の僧侶を日本全国に湧出せしめ、真なる平和国家を、現前せしめなければならぬ天業があるのです。

としての菩薩行を実践せしめると共に、天地一切の神々も、十方分身の諸仏も、その教えも、眷属も、すべて本仏釈尊の人格と、その教えに帰一融合せしめて、ここに円融大調和の大マンダラ法界を、この娑婆世界に建設するのです。

その途上には、必ずや恐るべき三障四魔が競い起り、手足がふっ飛び、両眼もぶつぶれるような、幾多の苦難が待ちうけていることでしょう。

然し、たとえ何があろうとも、やらねばならないのです。諸天善神の導きと加護を信じ、たゞひたすらに邁進せねばならないのです。獅子王の如き大勇猛心を奮い立て、仏勵たる天業を全うせねばならないのです。

そのためならば

そうです。宗教の如何を問わず、これを信ずる信じないにかゝわらず、生きとし生けるすべての人々は、等しく久遠劫來、久遠の本仏釈尊の子であるという、人間本来の姿を開顯せしめ、本仏釈尊の本法（法華經）を受持することによって、久遠の仏子

わたくしのからだなどは

何べん引き裂かれても

かまいません

### 宮沢賢治「鳥の北斗七星」

世界に対する  
大いなる希望を先ず起せ  
強く正しく生活せよ  
苦難を避けず直進せよ  
先づもろともに

輝く宇宙の微塵となりて

無方の空にちらばらう

### 宮沢賢治「農民藝術概論」

祈りなき平和はあり得ない  
敵をもいつくしむ心を深めよ  
とわの光りはその祈りより生ず

一 身延山街頭布教々箋

### 誓願なき人生は

波間にたゞよう浮草に等しい

敬謹説明

人間は誰でも「あ」としたい」「こうしたい」という理想があり希望があります。然し、どんなに熱望していくても、努力しなければ実現しません。しかも人に頼らず、自分みずから辛抱強く、一つ一つを実行し、その実行を積み重ねて行かねばなりません。こゝに、「これだけは必ず実行する」という誓いが大切になつて来ます。

誓願なき者の人生、それは、願いだけは持っていても実行のともなわないダラダラした人生であり、あたかも波間にたどよう浮草のようなものにすぎません。誓願を立てましよう、たとえ、どんなに小さなことであつても。

(白象)

熊本・身延

鑼鼓唱題行脚紀行

おのれに

打ち勝つもの



身延山大学卒業

象元

覚崇

沢小

田寺

これは本年三月五日、身延山大学を卒業した鷲峰第一期卒業生・沢田覚象君と小寺崇元君、そして藤森英一君の三名が、大学卒業と同時に、社会第一線に挺身して、大法を宣布せんとするに当たり、きそい起つて来るであろう幾多の受難・誘惑にも打ち勝つため、みずから試練として、四月十日より五月二十五日に及び四十六日の間、九州の南端・熊本の本妙寺より身延山まで、およそ数百里、タバコを断ち、一切、車に乗らず、お題目を唱え、ウチワ太鼓をうちならして、歩き通した鑼鼓唱題の行脚紀行記録である。

ちなみに、沢田君は京都府下の福知山出身、小寺君は熊本市、藤森君は長野県松本市の出身である。

三人は大学卒業後、それぞれ一旦実家に

帰り、四月五日には熊本の小寺君の崇心教

会に集結、出発の準備を整えた。

たゞ紀行本文中、四月分は沢田君が書き、

五月分は小寺君がまとめたものである。

ろが、その日は、出典をくじくような豪雨  
だった。翌る九日も終日、休みなく降りつ  
づいた。  
「少し小やみになつたら、少々ぬれても出  
かけよう」

と申しあわせていたのだが、小やみどこ  
ろか、皮肉なことに雨足は、一層はげしく  
なるばかり・・・・。

準備万端、整っていただけに、無性に雨  
がうらめしかった。ジリジリしながら、雨  
が小やみになるのを待っていた。

然し、三日目の今日（十日）になつても  
一向に雨はあがりそうでもない。最早、

△出発しようか？どうしようか？

テレビの天気予報では、一日中、雨という。  
実は、四月八日の釈尊降誕の聖日を期し  
て、行脚の壮途につく予定であった。ところ

## 熊本から福山へ

沢田 覚象

四月十日

今日もまた、朝から雨、どしゃぶりだ。

テレビの天気予報では、一日中、雨という。  
実は、四月八日の釈尊降誕の聖日を期し  
て、行脚の壮途につく予定であった。ところ

「雨の中を、つゝ走しろう」

期せずして、三人の意見はまとまつた。  
さっそく心願成就の水行をし、小寺君の御  
両親をはじめ檀信徒の、感涙あふれる熱誠  
に見送られて、崇心教会をあとにしたのが  
朝八時、シノつくような雨の中だった。

墨染の衣にモクランの袈裟、網代笠をか  
ぶり、「身延山」と染めぬいた黒の頭陀袋  
を胸にかけ、ピニールで包んだ荷袋を肩よ  
りつるし、

「一妙無窮、蘇生萬象」

と日高上人より書いて頂いた一尺三寸の  
ウチワ太鼓をうちならし、威風堂々（？）  
雨ニモマケズ（？）おれネズミになりながら  
ら、まず清正公さんで有名な本妙寺に参拝。  
加藤清正公の本廟（淨池廟）の前にぬか  
ずき、行脚の無事達成を祈願し、あわせて

如何なる試練にも、三人力をあわせて初一  
念をつらぬくことを誓願。午前九時、本妙

寺を出発、身延への長途についた。

雨は全然やむことを知らない。熊本市  
街を出る頃から、ますます雨は激しくなる  
ばかり。顔にしたゝる雨を拭いながら、

それでも、この日は十二里を歩いた。

今夜は、小寺君の教会信徒である緒方さ  
んのお宅にとめてもらうという安心感と、  
初日の緊張感とが、十二里踏破という無理  
な行程を可能な限りめたのであろう。

緒方さんの家につき、すぶぬれになつた  
衣類をぬき、冷えた体を風呂で温め、心の  
こもった夕食を頂いた時、はじめて人心地  
すると同時に、人の情けが身にしみた。

それにしても、しょっぱなから雨。  
「こりやあ、ついてないぞ。これから、も

つとひどいことがあるかも知れぬ。気をつければ……」

と自戒しあつたことだった。

#### 四月十一日

昨夜は、星の疲れと、知った信者さんの  
お宅という安堵から、ぐっすりねむれた。  
ところが今朝になると、体の筋々が痛む。  
まるで自分の体であつて、自分の体ではな  
いようだ。

昨夜、ほした衣類も、まだかわかない。  
どうせ外は今日も雨、なまがわきの衣を着  
込み、猪方さんの家族に見送られて出発し  
たのは朝十時。

およそ一里ばかり歩いて、小寺君の教会  
信徒である山口さんのお宅に立ちよつたと  
ころが、たまたまこの日が、

「同じ教会信徒である近所の、甲斐さんと  
いうお宅の、御主人が亡くなつて今日が、  
その葬式である」

といふ。山口さんのすすめ、甲斐さんの  
出迎えもあって、三人そろつて葬儀に参列  
心から故人の冥福を祈つた。

手甲、脚絆の行脚僧の会葬は、珍らしい  
ことであつたかも知れないが、遺族をはじめ  
参列者一同、三人の会葬を心から喜んで  
くれた。

この日は大牟田市まで歩く予定であつた  
が、会葬のため時間を取つたこと、  
「ぬれた衣類をかわかすように……」

とすすめられるまま、つい山口さんの親  
切に甘えて、一泊することにした。田舎の  
人は純朴である。

いまどき、こんなに純朴な人々がいたの

か・・・・・

と不思議に思えるほどだった。楽しい一家団らんの中、疲労の回復を計った。

四月十二日

朝、出発の時、なお小雨が降っていた。三十分もすると陽光がさし、空もカラリッと晴れ、すがすがしい新緑が目を楽しました。

衣類もかわき、心氣爽快。風光明媚な有

明海岸にそって、ひたすら大牟田へと急いだ。途中まで、小寺君の教会信徒であり現在身延山高校二年在学中の、西君のお母さんが、一緒に歩いて見送ってくれた。お母さんとしては、  
「せめて我が子の代りに・・・・・」  
という気持もあったことだろう。

昼すぎるになると、さすがに三人とも、足が思うように進まなくなつた。気ばかり急いでいても、激しい行進のため、疲れた足がままならぬ。自然、休憩時間が多くなる。そうなると、

「身延山につくまでは禁煙」

と書ったことが、うらめしい、当分、禁煙を守ることに苦しむだろう。

夕刻、大牟田市に入った。然し泊るあてはない。

「今夜は野宿になるだろう」

と覚悟していたものの、思い切って通りすがりの日蓮宗のお寺を訪ね、一泊の宿を乞うてみた。お寺の山門には「法華寺」という看板がさがっていた。三人とも宿を乞うのは、生れて初めての経験。おそる庫裏の玄関に立ち、あらかじめ用意してい

た身延山岩間布教部長さんの道中紹介状を

た。

差し出した。

然し、その必要はなかった。対応に出て  
来たお上人は、何と身延山大学の先輩で、  
曾って学生布教部長として、身延山街頭布  
教の当初から、活躍されていた林智佳師で  
あつた。

杞憂は安堵に変り、懐旧の情ひとしお。  
夕食後、林上人をかこんで、その後の身延  
山学生運動について、話題に花が咲いた。  
学生布教別動隊のこと、鷺峰会のこと、そ  
して身延山大学建設のこと等々。最後に、  
「今後の宗門興隆は、青年僧の自覚と実践  
によるほかはない」

と、固く手を握りあつたが、在校中、華  
嚴宣令を共にした同窓生との、キズナの深  
さを、しみじみと味あわされた一夜であつ

#### 四月十三日

今日の目的地は久留米。大牟田からおよ  
そ十二里あまり。林上人に見送られて法華  
寺を出発。鹿児島本線にそって国道を歩い  
た。

昼近く、瀬高という町に入った。町の中  
央の四辻には、三人とも見覚えがあった。

たしか今年の正月、冬休みの九州街頭布  
教の際、別動隊の学生がマイクをにぎって  
立正安國を獅子吼した街角だ。とても、な  
つかしかった。

感激深い足取りで、交叉点を渡ろうとし  
た時、この町の本淨寺住職徳永前貞上人の、  
お嬢さんとでくわした。

奇遇だった。徳永さんは正月布教の折、

心から別団隊を接待された。そして三月の身延山青年行学説習会の折には、姉妹共々わざわざ九州の果てから参加されたほどの方だった。

徳永さんに案内され、本淨寺で中食を頂き、潮高をたつ時は、徳永さん姉妹が、ウチワ太鼓をうって、町はずれまで見送ってくれた。全く予期しないことであつたのに、どれほど勇氣つけられたことであつたか……。

ところが、あと三里という所で、くたばってしまった。気持だけは一生懸命に歩いているつもりでも、足ふみばかりしていて、一向に前へ進まない。百メートル歩くのに、十分も二十分もかかっている。

小学校帰りの子供たちまで、どんどん私たちを追い越して行く。ある婦人が、私た

ちを指さして、

「アラ、ケッサクだ」と笑いころげた。

如何に手甲、脚絆の行脚姿は凜々しくとも、太鼓は勇ましくならしながらも、足ぶみばかりして、一向に前へ進まない恰好は、さぞかし滑稽なことだったろう。

笑いごとではなかった。恥も外聞もなく本当に苦しかった。たゞ仏天に、我が身をまかせたお題目があるだけだった。なれない体がお題目について行けなかったのだ。

さて今年三月身延山大学を卒業した同期生の、鷺次晴夫君のお寺である久留米の本泰寺にたどりついた時は、日は既にとっぷりと暮れ、時計は八時を少し廻っていた。

本泰寺は、今年の冬、街頭布教に来た際に宿泊した妙正寺と同じ寺町。町もなつかし

く、寺も同期生のお寺、心安く、くつろい

だが、寝床に入っても、体全体が痛んで、何度も目がさめた。

足の裏は大小の豆だらけ、炎症でうずいていた。炎症は足裏だけでなく、体全体、五臓六腑にも及んでいたかも知れない。

#### 四月十四日

昨夜、熟睡出来なかつた割に、今朝は大分調子が良いようだ。本泰寺から久留米の町はずれまで、鶴沢君とその友人が送つてくれた。別れに際し、互に向ひあつてお題目を唱え、

「共に、仏法の中に生きて行こう」

「そして共に、仏法を興隆しよう」

と誓いあつた時、思わず目頭が、ジー

ンと熱くなるのを禁することが出来なかつ

た。

まもなく三名は、鹿児島線より別れて筑豊線にそい、一路飯塚市へ向つた。冷水峠を越えて、人影もない山道を歩きに歩いた。日中、喉はかわき、途中に食堂とてなく、空腹をこらえて、やつと一軒の農家をみつけ、一杯の水をもらつた時の、その味は、どんなにおいしい飲物にも勝るものだった。

身延山在学中、食事の時には必ず、

天の三光に身を温め

地の五穀に魂を養う

みなこれ本仏の慈悲なり

一滴の水も

因縁にあらざることなく

一粒の米も

同胞の辛苦によらざることなし

我等いま菩薩道を行じ

安じて此の飯食をうく

法悦感謝きわまりなし

願くば、これによつて

壽命を増益し、

精進の力を整へ

以つて四恩に報ぜん

といふ、食前の食法を唱えて来たものであるが、今この一滴の水によつて、食法の一言一句が、そのまま身にしみて、尊く覺えずにはおあなかつた。

法華經一部八品二十八品の一々文々も、みずから菩薩行の実践によつて、食法の如く身に感じ、身に味わえるようになつて來るのであろう。

この日は、道中、色々な人々と話しあつた。中でも四十才を過ぎたぐらいの人で、「私は臨済禪に興味をもつて、真剣に禪と

四つに取り組んで來た」

といふ人が、後から單車で追いつき、

「今の貴方たちの姿こそ、私が果し得なかつた長年の夢を目の前に見てゐるようだ」と言つて、日頃の色々な悩みを語つた。

そして最後に、

「私は、今まで何度、自殺しようと思つたか判らない。然し世の中には、私のような人間が沢山いる。どうか自殺するほど悩み苦しむ人がないようだ、そういう人々を救つて下さい」

と言ひ残して、立ち去つて行つた。

この日の目的地である飯塚市の龍王寺についた時は、もう夕闇が迫つていた。龍王寺は冬休みの九州街頭布教の折、一泊させてもらった所。あいにく住職の福山日種法尼は、身延から東京方面へ出かけられて留

守だった。

然し信徒の中には、顔みしりの人も多く温い歓待をうけ、色々な方法で足の治療をした。

足の裏は全面、幾重にも豆が出来、破れた皮膚はガサガサと厚くなり、まるで人間の足ではなく、野獸か化物の足のようになっていた。

#### 四月十五日

朝未明、多くの信徒の唱えるお祈りの声にフト目がさめた。

「しまった。朝寝してしまった」

三人は、あわてて布団の上に起き上った。腕時計をみると、針は丁度四時をさしていた。お祈りは、本堂の外でお百度をふむ人々の声だった。

ラヂオが六時を知らせると同時に、さしも広い本堂一杯に居列んだ信者さんたちの朝のお勤めが始まった。

住職が留守であつても、大人はもとより登校前の小学生、中学生の子供たちまで、一心に太鼓をうち、お題目を唱えている。真剣な信徒の朝参りの姿、一人二人ではなく何十人という人々の希望にみちた顔。この一事をもってしても、こゝまで指導された住職の努力には、自然、頭のさがる思いをした。

朝勤を終えた數十名の御信徒に見送られて、龍王寺を出発したのが朝七時四十分。このところ無理な強行軍がつゞいたためか、足の痛みがひどく、元気な時の半分も歩けない。

遠川の河原で、昼飯を食べ、三人とも

申しあわせたように、その場で横になってしまった。知らぬ間に深い眠りに落ちていた。フト氣ずいた時は、時計は一時間あまりもすぎていた。

午後三時ごろ直方市に入った。市とはいっても郊外の、河土手の県道を歩いていたのだが、こゝからは日高上人の誕生の地、そして修行された福知山々腹の滝も近い。まもなく、この前の街頭布教の折、バスの中から日高上人に、色々と説明してもらった風光が開けて來た。誕生の山蔭や、遙かにそびえる福知山の山容が目にとまり、とても懐しかった。

川ぞいの県道と別れて、市街へ入る頃、觀音寺があった。正月街頭布教の折、暫らく休憩した所。立ちよって挨拶すると、あいにく住職大塚侃義上人は留守だったが、

「一泊するようになつて  
と家族の方にすすめられ、御厚意に甘え  
ることにした。

#### 四月十六日

朝食後のひと時、大塚上人は、私たちの行脚修行を大へん喜びながら、「人間一生涯の中には、色々な出来ごとがあろうが、今の此の氣持を忘れることなくあくまでも初一念を生涯つらぬくこと、そして誰人に対しても、真心をもつて接し得る人間となるよう」

と柔しく励まして下さった。

寺族の方々に見送られて、觀音寺を出発したのは朝の九時。気分も爽快、足も快調だった。

向へ歩いてしまった。結局、遠廻りしたわけであるが、これは、さすがに心身にこたえた。

然し、ひるむことなく夕刻、八幡の龍潛寺についた。こゝは明治の律師・日輪上人

で有名なお寺、正月九州布教の初日、別動隊が一泊した所でもある。山門をくぐれば境内がなつかしい。

本堂の前に立って法味を言上していると住職松尾周輝上人の奥さんが駆けよって来て、

「身延山大学の方ですね。さあ、どうぞ中へ……。」

と、柔しく声をかけて下さった。駆けてまで出迎えて下さった人の情、グッと胸はつまり、駄が熱くなつた。

松尾上人は、日高上人の立正大学時代の

旧友、寛容を方だった。入浴、夕食後、家族団らんの家庭的な雰囲気の中に、旅の疲れをいやした。

#### 四月十九日

アスファルトの焼けつく熱さと、石をふんだ時に来る直接のショックを防ぐため、熊本を立って以来、昨日まではいていた白の地下足袋を、底の厚い白の運動靴にはきかえた。

ところが、なれないため、新しい豆が次々に出来た。この日だけでも豆の数は片足十二も数えられた。

八幡から門司へ向う途中は、行けども行けども繁華街。腰をおろして休むべき所もなく、足は焼けつくような痛みを増すばかり。

ハダシになるわけにも行かず、足を水で  
ひやすわけにも行かない。横を通りすぎる  
門司港行きの電車を見ては、何度も△乗ろう  
か△と思つたか判らない。

ひるむ心を鞭うち鞭うち、我が心と戦い  
ながら歩きつゝけた。半死半生の思いでは  
あつたが、そんな哀れな姿を市街の人々に  
見せてもならない。胸をはり、大音声にお  
題目を唱え、太鼓もインインと打ちならし  
て歩いた。

△△△とえ路上にぶつ倒れても、日蓮宗青年  
僧の誇りを失ってはならない

と、そればかりを思つた。

遂に門司に入った。山腹の大雄寺につい  
た時、赤い夕陽が、眼下に見おろす関門海峡  
一杯に、絵のように照り輝いていた。

大雄寺は、十三年前、日高上人が九州よ

り東京開教へ向われるまで、ことと八幡の  
龍潛寺を中心に、北九州一円に亘って宗門  
青年運動を展開していた所である。

それだけに住職刀禪義昭上人も奥さんも  
私たち身延山駕峰会運動に対する、よき理  
解者であった。

自然、話しあはずんだ。そして日高上人  
が曾つて大雄寺滞留中、読んだといふ赤線  
の入つた書物や、使用したといふ携帯用の  
普通の三倍もあるような太い万年筆や、書  
き遣して行つた多くの原稿などを見せても  
らつた。

その中、活版で印刷されていた「教觀一  
体論」という小冊子を一冊、記念にもらつ  
た。文は、日高上人の青年時代の、沸騰す  
るようを迫力が、全面にギリギリするほど  
横溢していた。

夜になって、大雄寺の庫裡の二階から見  
おろす関門海峡の夜景は、さながら百万ド  
ルの夜景であった。海峡をはさんで対岸の、  
下関の灯眺めていると、

（熊本を出发して以来、八日目、やっと九  
州の北端、門司までたどりついたのだ）  
（我れながら、上歩いたものだ）  
（どう感激が湧いて来た。）

（然し、それも身延までの何分の一なんだ  
ろう）  
（と考えた時、なつかしい身延の面影も、  
鶴の彼方へ消えて行つた。）

四月十八日

今日は刀禰上人御夫妻の御厚意に甘えて  
一日中、休養させてもらつことにした。汗  
によどれた白衣や手甲・脚絆などを洗濯

してもらい、朝食後、二階で昼すこまで、  
死んだように寝込んでしまつた。

夕方近く、刀禰上人に案内されて、近く  
の和布刈山（メカリヤマ）山頂にそびえて  
いる仏舍利塔バゴダに参拝した。

このバゴダは釈尊の降誕二千五百年（南  
方仏教の所伝）を記念して、世界の平和を  
願い、第二次世界大戦における戦死者の  
靈を慰めるため、ビルマ政府・仏教会・門  
司市、並に遺族の協力によつて建立された  
もの。

こゝにはバゴダの外に僧院や戒律堂があ  
り、現在三人のビルマ僧が、二百二十七戒  
の厳しい戒律を守つて、日夜精進していた。  
私たちはビルマ僧と面会することにした。  
対談は事務的な話して終つてしまつたが、  
最後に、

「ビルマ仏教と日本仏教の相違について」

と質問すると、

「ビルマの仏教は一つで、宗派といらものではなく、みな仏陀の教えに従って信仰している。然し日本の仏教は、同じ仏陀の教え

から出たものでありながら、多くの宗派に

分れて争っている」

と答えた。

そして彼等が見た日本の仏教、特に僧侶の生活は、彼等自身が現在も二百二十七戒の戒律を厳守しているだけに、ものすごくよしだらに見えるらしく、大乗仏教の僧侶に対しては、むしろ輕蔑の念をもつてゐるようだ。

日蓮聖人は、

「日蓮は、いづれの宗の元祖にもあらず、また末葉にも當らず」

と宣言され、立正安國の祈りをもつて戒とされた。然し今、その祖風は地を払つて

いる。ビルマ僧の言葉を聞くにつけ、祖道復興の斗志が、勃然として沸騰する。

#### 四月十九日

今日は、いよいよ九州を離れて本州へ入る日である。午前十時、大雄寺を出発。何かしら後髪の引かれる思いがした。

二キロばかり行った所に、關門トンネルの人道があった。エレベーターで地下へ下り、歩くこと七百八十メートルで、本州の地を踏むことが出来た。あまり近すぎて、海峡を渡った実感が湧かない。

然し、これまで九州における十日間は、野宿することもなく、行く先きざきのお寺や御信徒から、身にあまる歓待を受けて来

た。

これひとえに、仏天の加護であることは言うまでもないが、また身延山街頭布教によって結ばれた法縁のおかげである。初めての地と違って、街の人から受けける空気も違う。

然し、これから進む山口県、広島県は、俗に真宗念佛のメッカともいわれ、日蓮宗の寺院も多い未開拓地。身延山街頭布教も、まだ此處には入っていない。

ひきしまる気持で国道二号線を、瀬戸内海の海岸にそって歩いた。足の豆は、あいかわらず歩くごとに増えていた。  
あまりの痛さに我慢出来なくなり、しまいには涙が出てしまった。泣いてすむことなら、いつそのことを思いながらも、歯をくいしばって、フト考えることは、

△最初から覺悟していたはずなのに、自分たちは、何故こんなに苦しんでいるのだろうか？……

△苦しむだけの価値が、こんな行脚にあるのだろうか？

△どうせ苦しむことなら、もっと良い修行方法が、他にありますまいか？

△スポーツセンターやタクシーで行き交う人々の中では、果して何人の人が、自分たちの修行を理解してくれているだろう？

△自分たちは、修行という名によつて、社会の片隅で、カラマワリをしているのではなかろうか？

といったような疑惑であった。勿論こうした疑惑は、

△一刻も早く、修行の苦しさから開放されたい

と思う、自己妥協の中に満てて来るもの

であることは百も承知しながらも、苦しければ苦しいほど、つるる疑惑は払拭出来ず、肉体と戦い、疑惑と戦いながら歩きつづけた。

疑惑は下岡市小月町の本照寺につくまで消えなかつた。本照寺の住職は大庭淨學上人、夫人は門司の刀藤上人の姉さんに当る方であった。

#### 四月二十日

昨日あまり足が痛んだので、試みに足をぐるぐるホーティで巻いて、完全武装をしてみた。そのためか今日は、さほど痛みを感じない久しぶりの快調だった。

然し今日ばかりは、全く無知の旅、宿泊地の予定もないため、何処かで野宿をしな

ければならない。

「昼間、あたゝかい中に睡眠をとつて、涼しくなつてから、夜の道を歩けるだけ歩こう」

ということに意見がまとまつた。

午後しばらく歩く中、国道の道端に、手頃な松林を見つけて飛び込んだ。そこは墓地だった。何だか遇然ではないような気がした。うす氣味悪く感じたが、他を探すのも面倒と、墓地の横の方で、夕日が落ちるまで、ごろ寝した。

夕方から歩き出したが、さすがに三人とも空腹で足に力が入らない。ものを言ひ元氣もない。皮肉なことに、こういう時に限って、食堂も見つからない。やつとの思いで見つけた食堂も、その日は臨時休業。

夜九時を少し廻った頃、ようやく食堂の

内へ入れた時は嬉しかった。ひと心地ついて、更に一時間ばかり歩いたが、疲れと共に無性に寝むくなつて来た。

「墓地の無縫さまが、ついて来たかも知れんぞ」

などと冗談を言いながら進む中、道端の田圃の中に、ワラが積まれているのが目に付いた。幸い人家も遠く、通る人影もない。

ワラを集めて、その上に寝ることにした。

十三夜の月が、つめたく三人を照していた。

蟲の音が足もとに聞えた。哀愁をそよぐ蟲の声、ふと、

鳥と蟲とは鳴けども、涙おぢず

日遼は泣かねども、涙ひまなし

と言われた大聖人の言葉の一句を思い出した。それにしても、これしきりの行脚の苦しさに、思わず涙してしまった自分自身

が、大聖人の涙にくらべて恥かしくてならなかつた。

心なき蟲の音も、行脚の旅空では、教えを垂れる声とも感ぜられる。夜はシンシンとふけて行つた。寝つけないまゝ我が身のつらさを思うにつけても、大聖人の苦難を偲ぶと、また何時しか新たな涙が、寝ワラをぬらしていた。

#### 四月二十一日

昨夜は、初めての野宿であったが、夜露が、こんなにひどいものとは予想もしなかつた。上にかぶつた衣が、水をうつたようだ、びっしよりぬれていた。

少しウトウトしただけで、ガタガタふるえながら三人とも、ついに一晩中、寝つくことは出来なかつた。

そうかといつて、起きて歩く元気もなくあたりが明るくなるまで、ワラの上で横になっていた。

東天が白らみかける頃、道端であるから人目につかぬ中にと、直ちに出発。昼近くなると、今日は特に真夏を思わせるような暑さ、アスファルトは焼けつき、カゲロウがゆらぐ、喉がひりつき、水が無性に飲みたい。

そんな時だった。

農家の主婦が、洗濯するのにタライに水をくんで、ザアザア庭に流すのだが、その水の使い方が、あまりにも粗末に見えた。喉がカラカラにかわいた時にもらったコップ一林の水の有難さ、水の尊さを教えてやりたいほどだった。

途中、水筒三ヶを買って水をつめた。水

を持っていると心強い。

池のそばで、少し午睡をしてから歩き、そして歩いた。

道中の疲れが苦しみになつて来だすと、毎日毎日お題目を唱え、太鼓をうつて歩くこと自体に対し、再び、

何のために？……

修行のためか？……

布教のためか？……

と反芻しながらも、得体の知れない無意味さ、むなしさに襲われる。

こんな調子では、果して身延まで歩き通せるだろうか？

たゞ意地だけが、この道中をつづけさせているのではあるまいか？

といつたような氣にもなる。毎日毎日が自分の心との戦いだった。それでもフト、

「どんなに、まどい苦しんでいても、然し

と笑った。

それでも毎日、一步一歩前へ進んでいるではないか。退転したのではない。足ぶみしているのでもない。何はともあれ前進している。これが事実だ。一步一歩身延へ近づいているのが現実なんだ

／現代には、現代にマツナした方法があるかも知れない。然し、誰が何と言おうと、やり出したことは、最後まで、やり通さなくては……

／迷いながらも、それでも真実へ向って進むのが、そのまま人生なんだ

／夜十時がすぎた頃、野宿するのに適当なネグラを探したが、あいにくのくらやみで見当もつかない。十二時がすぎて、やっと見つけた大きな土管の中に、三人くるまつて寝た。

途中、昨夜食堂であったトラックの運転手が、折り返す車を止めて、

然し、土管のコンクリの冷えと、夜の寒さで、一晩中、寝つけなかった。ブルブルあるえながら、三人だきあって一夜を明した。

「熊本から身延まで、どのくらいかかる」と尋ねた。  
「二ヶ月ぐらいの予定だ」と答えると、

「二ヶ月もあれば世界一周旅行が出来る」

四月二十二日

朝四時から歩き出しが、三人とも冷え腹が痛んだ。ついに藤森君が血便してしまった。

足裏の豆の傷のためか、三人とも両股の淋巴結がはれ上った。

やむなく今夜は旅館に泊ることにした。徳山市へ入って、旅館の前で案内を乞うと汗によどれた異様な三人の姿に、びっくりした旅館の番当さんから、ていよく断わられてしまつた。この時ほど自分自身を、みじめに思つたことはない。

もう先きへ歩く元気もなく、公園のベンチに腰かけていると、徳山市内で母蓮宗の寺院がただ一寺寺といふ、神力寺のあることが判つた。

野宿して知る衣食住の尊さ。夜具にしても食物にしても、そして一枚のタタミ、道具にしても、どれほど多くの人々の丹誠がこめられていることだろう。最早それは、一個の物質ではなく、人の真心と努力の結晶であった。

「神力寺に一夜の宿をお願いしよう」

三人は、よろよろと立ち上つた。寺は公

園の近くだつた。住職瀬原歎亮上人は心よく迎え入れてくれた。同門の情けが身にしました。

久しぶりに入る風呂、体を何回も洗い、生き代つた思いがした。二日間の野宿によって、今まで何気なく使つていた夜具が、どんなに有難く思えたか、言うに言葉も知らなかつた。

瀬原上人をはじめ家族の方々に別れをつ

四月二十三日

げ、神力寺を出発したのは朝八時少し前。

アスファルトの国道を上へ上へと進んだ。

昨夜、鳳呂でマッサージしておいたためか、昨日のように足は痛まなかった。国道は行き交う車の、排気ガスのために息苦しい。またアスファルトは直接足にひびいて舗装しない田舎道より歩きにくい。

途中、長距離トラックの運転手が、車を停めて

「何処まで行きますか。よかつたら乗らな  
い」

と、すすめてくれた。たとえ車に乗らなければ、親切に声をかけてくれると嬉しいものだ。一言の言葉の表現の大切なことを、しみじみと思つた。

ところが、こんな行脚姿で歩いていれば、いたずらに車体をぶつけるように疾走し、

て来る車もある。

「馬鹿野郎」

と、どなって行く者もおれば、手をふつてくれる人もいる。人は様々だが、そうした現象も悉く、実は私たち自身の心の鏡であろうか。

「我が心の十界が、そのまゝ環境の十界に映し、環境の十界が、そのまま我れに返て、我が心の在り方をたゞす。これが修行といふものであろう。」

夜八時すぎ、山口県玖珂町の歎明寺についた。住職伊藤慈雄上人は、身延山大学の出身者であった。自然、身延の語とに花が咲いた。

伊藤上人は、現在三人の孤児を引き取り、我が子に変らぬ愛情で育てられた。自分の子供ですら、まともに育てるのも大変

た、という今の世で、なかなか真似しようとしても出来ないことである。お上人の温い人格にふれながら、色々なことを教わった。

#### 四月二十四日

今日の予定は、岩国まで四里たらずの行程。午前中、欽明寺で色々なものを見聞した。

伊藤上人は非常に器用な方だった。大工左官はもとより畠代えまで、すべて自分でやってしまわれていた。

聞けば欽明寺には、最近入山されたとい

うのであるが、入山当初の荒廃した面影は何處にも残っていなかった。そして寺の隅々まで、屋根瓦から床石までも、お上人の息吹きの通っていることが、私たちにさえ

手に取るよう感覺された。

境内には、見事な宝塔が一基建立されていたが、それも伊藤上人の製作であるといふのは驚くほかない。

「人間、努力一つ、何ごとでも、やれば出来る。やり通すことだ」

という感銘を深くした。

午後、欽明寺を出発。国道を離れ、県道にそつて山道を歩いた。山々の青葉が美しかった。距離も短く、アスファルトの焼けつきもなく、車も通らず、久しぶりに周囲の風光が楽しめた、ゆつとりとした行脚だった。

夕刻、早めに岩国の清泰院に到着した。住職渡辺泰深上人は、何處も宗会議員をつとめられた方で、お寺では保育園もやっておられた。私たちの行脚修行を、心から喜

ばれたお上人は、

「今後の宗門は、是非君たちのような青年

僧の勇気と團結によつて興隆してもらいた

い」

と励まして下さった。

四月二十五日

朝八時、清泰院を出発。保育園の子供た

ちが、すっかりなついて、  
「また来いよ」と手をふっていた。

と出門まで見送つてくれた。子供たちは  
私たちが遠くなるまでも、

「オーケイ、オーケイ」と手をふついていた。  
途中、岩国の錦帯橋をすぎ、間もなく山

口原と広島県の県境を越え、日本三景で有名な安芸の宮島の、赤い鳥居を右手に眺め

ながら、海岸にそつて一路広島市へと急いだ。

広島市には同級生で、同じ鷺峰会第一期卒業の武村浩司君がいる。武村君も私たちと一緒に、熊本から身延まで行脚することになつてゐたが、お父さんが急逝され、お母さんが一人で頑張つておられるため、手を離すことが出来ず、行脚を断念したものであった。

今日中に広島まで入り、武村君ともあいたかった。然し里程は、何時もより遙かに多い。夕方近く雨が降つて來た。幸い廿日市町の常国寺に、一夜お世話になることが出来た。

住職中川潮進上人は、病氣入院中であつたが、奥さんや檀信徒の歓待をうけ、夜十時すぎまで、有意義な信仰体験談などう

かどった。

#### 四月二十六日

昨夜から今朝にかけて、はげしく降つて  
いた雨も、出発近くになると、小降りにな  
つた。

広島市まで四里たらずの里程。途中、武  
村君が車で出迎えに来てくれた。肩にくい  
込む荷袋を車に積み、身軽るになつて道を  
急いだ。

武村君の家は寺ではなく、寿老園という  
老人ホームを經營している。老人は現在百  
二十人ぐらい居るという。

そこは、小高い丘の上だった。丘の途中  
まで、老人たちがウチワ太鼓をうつて出迎  
えてくれたのは感激した。

まず武村君のお父さんのお墓に詣で、御

宝前では心から、広島原爆死者の靈に回向  
し、あわせて被爆者の健康を祈念した。

#### 四月二十七日

学友の家の気安さから、今日は一日休養  
させてもらうことにした。

十分睡眠もとり、その間、衣類も洗濯し  
てもらった。午後は老人ホームの方々と一  
緒になつて、信仰の話しなどした。

こゝの老人たちは、殆ど真宗の家人で  
日蓮宗の家人人は、ごく少數だった。然し  
今では、めいめいウチワ太鼓をうち、お題  
目を唱えている。

「信仰は、各自の自由にしてあるのですが  
よくこれまで法華經を信するようになつて  
くれました。私たちも、これでこそ、老人  
ホームをやって行く、やり甲斐があるとい

うものです。」

とは、武村君のお母さんの語るところで  
あつた。

#### 四月二十八日

今日は立教開宗の聖日。日蓮聖人が今よ  
り七百十二年の昔、房州清澄山頂に立って  
太平洋上、水平線の彼方にさし昇る旭日に向  
って、はじめて南無妙法蓮華經と唱え、  
世界に向って正法宣布を宣言した朝である。  
身延山では街頭布教隊が、清澄まで長駆  
奉宗一致の開宗式典に臨み、更に東京へ赴  
き、靖国神社から千鳥ヶ淵の無名戰死の墓

苑に詣で、神保町へ向って街頭鼓唱題の大行進を展開することになつてゐるといふ。  
私たちは、はからずも原爆の地、広島で開宗会の聖日を迎えた。武村君をはじめ私

たちは、老人ホームの方々と共に、御宝前  
で心から清澄山上の日蓮聖人に報恩の誠を  
述べ、世界恒久平和のため、二度と戦争がないように、と正法広布の誓いを新たにした。

八時、老人ホームを出発、身延への途についた。老人たちが、老い目に涙をしばた  
ゝきながら、太鼓をうつて見送ってくれた。  
「おじいさん、おばあさん、幸せに……」  
と心から幸いを祈らずにおられなかつた。

武村君が、一緒に行脚の出来ないのを残念  
がり、〈せめてもの〉と、途中まで一緒に  
太鼓をうつて歩いた。

パン工場の前を通った時、女工さんがバ  
ンの包みをもつて来て供養した。見知らぬ  
人の小さな真心、それがどれほど私たちの  
勇氣を鼓舞したことか。

町はそれで武村君と別れた。別れに際し  
「驚峰会の者は、何時、何處にいても、驚

峰魂を忘れずに頑張ろう」

と誓った。そして四人して、マハトマ・

ガンディーも口ずさんだといふ、古代インド  
のバゴワン・ザイターの一節を誦誦した。

我れ天上の榮華を求めず

また地上の王位をも求めず

たゞ苦しむ民衆の中にあって

民衆を救わんと願うばかりなり

劇的な離別であった。太鼓をうち、お題

目を唱えながら、道を左右に分った。

これより、およそ三里ばかり行った所に、

手頃なワラ小屋が、山の麓に、ボツンとあ

つた。これから先きは神になる。何時また

こんな場所があるか判らない。幸い昼間、  
女工さんから頂いたパンがある。これを夕

食に、少し早いが、ワラにもぐり込んで野  
宿することにした。

△大聖人は立教開宗の日、地頭の東条景信  
に追ねて清澄を下った。私たちは、この日  
ここで野宿している△

いさゝか感傷的になつて、ウトウトして  
いると、ワラを取りに来た農夫に起された。

農夫は何もとがめず、

「火の用心だけはして下さい」

と言ひ残して立ち去つた。既に夕闇が迫  
つていた。

四月二十九日

朝、起きてみると、せっかく武村君のお

母さんに洗濯してもらって、ノリまできい  
ていた白衣も、ワラのススで、すっかり汚  
れてしまっていた。

然し、野宿した割に、何時もより体の調子がよい。早朝より休みなく歩きつゝけたのに疲労を感じない。足はクンクン進む。

こんな時は気分も爽快。まるで自分がつとめて歩いてるのでなく、行脚という行が自分の体を歩るかせているような心地がする。

△「仏乗に乗ずるというのも、こういうようをことかも知れない」

と思つたことだった。或は行脚が身について来た証拠かも知れない。

「法華經の信仰とは、絶対能動の本仏教尊

のお題目を、絶対受動することだ」

「自分たちが、お題目を唱えるのではない。お題目にあって、自分たちが唱えせしめられていくのだ」

「成仏とは、自分の力で仏界に入るのでは

と語った。そして、

ない。如來の秘密神通力によって、仏界へ入られめられている自己の尊さを発見することだ」

といった日高上人の日頃の教えが、はじめて納得出来るようを氣もした。

夕刻、

△今夜も野宿になるだろう。そのつもりで少し早目に夕食をすませ、ひとねいりしてから、また夜道を歩こう

と申しあわせ、夕食をすませた頃、一人の人から話しかけられた。尾道市の金田さんといふ人であった。この人は船舶会社の専務さんで、

「私は、宗教はよく判らなば。然し、その日その日を、大切に過ごすように心がけて

「尾道の妙宣寺の住職である加藤慈貢上人は、私と同級生だから、妙宣寺へ行って泊めてもらいたい」

と親切に紹介して下さった。

私たちが、ヒツナハイクのような恰好であつたら、見も知らぬ人までが、どうしてこんなに親切にしてくれるであろう。

（如法の袈裟、衣のお蔵け）

と、つくづく法衣の尊さを思わずにおれなかつた。

#### 四月三十日

妙宣寺を出発したのが朝八時少し前、一路福山市へと急いだ。

足裏は、豆の上に豆、その豆の上にまた豆、皮が三重、四重に厚くなつたせいか、痛さを感じない。

今年は東京オリンピックの年だが、前回のオリンピックで、マラソンに優勝したエナオビヤの選手を思い出す。彼はハダシで走った。彼の足裏も、私たちのように厚い皮だつたろう、と思つて苦笑した。

夕刻五時前、福山市内の国道筋にある通安寺についた。通安寺は戦災で焼失し、本堂は最近再建されたばかりの鉄筋造り、大へん立派なものだった。

住職前原恵澄上人の話しへ、

「福山という所は、生活が豊かなせいか、それだけに信仰心も薄い所だ。宗教も一種の慰安的なものとしか思っていない」と語っておられた。そして、

「この人に信仰心をもたせようと思つて、七年前から、その家に通つてゐるが、なかなか判つてくれない。それでも最近になつ

て、私がお座をあけると、私の後に坐るし  
話しにも、少しずつ耳を傾けるようになつ

て  
來  
た

と語っておられたが、人間一人を救うといふことが、如何に容易ならざる大へんなことであるか、つくづくと考えさせられた。一夜であった。

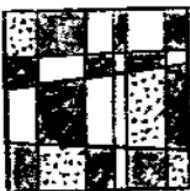
「いな、人ごとではないのだ。仏さまの目から見れば、自分自身、末だ仏知見の道にも入れず、マゴマゴしているさまでなのだ」と反省する時、これから先きのことを思

えは思うほど、  
み仏よ、大聖人さまよ、諸天善神さまよ  
どうか懲かな私たちを、お導き下さい。お  
導き下さい

と叫びたいほどだった。

福山から身延山へ

小寺崇元



五月一  
日

朝、外の物凄い風の音に目をさました。

まだ明けやらぬ寺の庭は、風雨に乱れていた。

この強風と雨の中を、出発しなければならぬが

と思うと、オチオチしてもおられないので

朝動、朝食をすませて、本堂で前原上人上話をしている中、風こそまだ強いたが、

幸い雨は小降りになつて來た。

一行は心からお詫を述べ、通安寺より倉敷へ向って出発した。遅く風は向い風、思うように足が進まず、文字通り風を押しで四時間ほど歩いた頃、両膝が急に痛み出した。

雨の中のこととて腰をおろして休む所もなく、たゞお題目の声ばかりを張りあげ、三名たがいに励ましあい、痛む足を引きずって進んだ。やがて広島県との県境を越えて岡山県に入った。夕刻、あたりが薄暗くなるころ倉敷の町へ入り、本町の本榮寺についた。本榮寺住職安井智秀上人は、身延山八十世、深見日円上人の甥に当る人、一夜の宿を乞うと、心よく迎い入れてくれた。お上人も奥さんも大へんやさしい方だった。身も心も安らぎ、

△一日中、強い風雨の中を堪えぬいて、こゝで足をひきずつて来た甲斐があった。という安堵と喜びで一杯だった。その夜三名とも、死んだような深い眠りにおちた。

### 五月一日

本榮寺を出発するに当つて安井上人が、岡山市の妙広寺住職、都守（ツモリ）泰一上人へ、電話で連絡して下さった。

妙広寺の御返事では、

「一刻も早く到着するのを待つてゐる」という。都守上人のことは、身延山大学の先駆である清水英雄師が、日蓮宗布教研究所を卒業した時、中國地方の行脚修行を試み、妙広寺に宿泊して、大へん有意義であったという話して、聞き知っていた。それにしても、その日の宿が決っている

と、どんなにつらいことがあっても、そこまでたどりつけば、という安心感から、心身共に随分明るい修行が出来る。

それとは反対に、宿が決つていなければ不安が先きだち、悲愴感のぬぐうべくもない。

この日は幸い、暑くも寒くもない、こゝろよい天候にめぐまれ、夕方の四時には岡山市に入ることが出来た。

時間が早いので、市街を肇鼓唱題して廻り、東田町の蓬昌寺に参拝。その足で妙広寺へ向った。

門前につくと、都守上人が本堂の扉を開き、御宝前に灯明をつけて、出迎えて下さった。

夜、都守上人を中心、家族の方々と共に、信仰上の問題、数学上の問題、等々の

色々なお話をうけたまわり、大いに勉強になつた。

熊本から身延山までの行脚は、確かに歩きぬくことが目的ではあるが、立ちよつた寺院のお上人の方々から、色々なお話を聞くことも、逸してはならない大事を勉強である。

そうしたわけで、話しあはずみ、気がついて時計を見ると、既に十二時を少し廻っていた。

### 五月三日

この日は、都守上人の御厚意に甘え、一日休養をとることにした。

午後一時より法要があり、三人とも法要

に参列。檀家の方々には、

「恩いもかけないことだった」

と喜んで頂き、却って恐縮せざるを得ないほどだった。

それにしても岡山市は、去る三月十六日全市の日蓮宗僧俗をあげて、身延山荷頭布教が展開されたばかりなので、私たちの姿を通して、身延山がなつかしがられている風であり、また私たちにしても、こうした檀信徒の姿に接すると、ますます身延を中心とした全国的な布教体制の確立を痛感させられたことだった。

### 五月四日

朝九時、都守上人をはじめ家族の方々に勧めながら妙広寺を出発。一路国道二号線を進んだ。

道もよく、体のコンディションもよいためか、何時になく速いペースで歩いた。

途中、路上前方から、私たちに向つて、

卑劣な野次を飛ばしながら疾走して来た車があった。二、三の若者が乗っていた。彼等は、すれ違いざま、私たちに卵のカラをぶつけて、走り去つて行った。

今までにない突然の出来ごとに、私たちは、たゞ茫然と、その車を見送った。

僧形擊鼓行脚の姿を見て、野次を飛ばしたり、ものをぶつけてたりするのは、おそらく創価学会の者に相違あるまいが、それでも常識では考えられない行為である。

腹はたったが、然し

△私たちの行脚が序々に、修行として仏天に認められて來てゐる証拠だ△

と思ひ返せば、また一段と、勇氣とフアイトが湧いて来る。それにしても、こうした目にあった時こそ、當不輕菩薩の精神

で、敵をも礼拝すべきであつたろう。

かねて驚峰訓に、

おのれに敵する者のために幸いを祈れ

神仏は、その心に住みたもう

と教えられていないながらも、咄嗟のこと

はいえ、その場で礼拝行もなし得ず、その祈りの心はおろか、却って怒りの心を覚えたことは、

△まだ修行がなっていないからだ△

と、青臭い自分自身を反省せざるを得なかつた。

か

その夜は、岡山県和気郡備前町の妙圓寺

のお世話になつた。妙圓寺には国宝の釈尊

の座像や、仏足石など、尊い宝物が安置さ

れている、古い歴史のお寺だった。

今日は端午の節句、

△何處かに鯉ノボリが立ってはいまいか△

と空を仰けば、小雨が降っていた。

この日、身延山からは、今年の三月、日蓮宗布教研修所を卒業した高田前敬師が、

故郷熊本へ向って、単身、出発することになつてゐる。

私たちは熊本から身延山へ、高田師は身

延山から熊本へ、道は逆ではあるが、同じ姿の、同じ行脚。それにしても私たちは三人、

人、高田師は一人。

△一人では話し相手もなく、さぞかし淋しからう、つらからう△

と、朝動の時、高田師の道中安泰を祈念した。

また身延からの便りによれば、今年三月

身延山大学を卒業した驚峰会第一期生の藤

塙義誠君は、日下、本年第一期の信行道場入行中であるが、五月十七日、道場満行と同時に、身延山から故郷の信州駒ヶ根市へ向って、これも単身、轟駆行脚して帰る、といふ。

期せずして五人の青年僧が、各街道に警護宣令する。あとこの数が十人、百人となるならば、白蓮宗門の僧道復興、正法広布は、火を見るより明かである。

「時を待つべきのみ」

と大聖人は仰せられている。

「やろう、時の来るまで……」

私たち三人は勇氣あらたに、小雨ふる中、住職木村学齋上人に見送られて妙圓寺を出発した。

お昼ごろ雨はやんだ。然しつる靴がぬれているため、足は思ったより痛んだ。その

上、夕暮になつても宿の見当がつかず、一層、痛みと疲れを感じた。

やつとの思ひで妙圓寺についたが、舞住職が不在中、

申し訳けない

と思つたが、過労のこととて、無理にお願いして、本堂の隅で一夜を明かさせてもらつた。

五月六日

明ければ、すがすがしい朝だった。姫路市へ向う途中、それも姫路の少し手前であったが、聖徳太子の靈廟があると聞いて、参拝に立ちよつた。

姫路市では、仏舍利塔に参拝したりしながら、昨年の夏、身延山布教別動隊として姫路街頭布教をしたことなど偲び、御着の

法華寺を訪ねた。

法華寺は、およそ三百年來の古い歴史をもつてゐるといふ。住職平井学山上人は、

身延山大学の先哲日野学哉師のお師匠さんには当つてゐる心安さもあつて、つい話しがはずみ、就寝したのは十二時すぎだった。

### 五月七日

法華寺を出発したのが遅く、午前十時をすぎていた。今日の行脚行程は遠い。途中何度も、車に乗ろうかと思つたが知れない。

一人が弱音をはくと、他の二人が叱咤した。そういうことを三人が交互にくくりかえした。ともすれば自分に妥協してしまひそうなる心を懼うち懼うち、

〈行ける所まで行くんだ。少しでも歩くんだ。暗くなつても明石までは……〉

と励ましあつた。

明石には本立寺がある。本立寺の住職野口泰信上人は、身延山岩間布教部長の立正大学時代の教え子、日高上人とは同級生。昨年夏の神戸街頭布教の折、私たちと顔見知りである。

夜九時近く、やつとの思いで本立寺についた。太鼓をうちながら玄関に立つと、「よおッ、来たな」

と笑顔で迎えて下さった野口上人の一声に、倒れ込むような安堵があつた。  
日記をつける元気もなく、その夜は早々に休ませてもらつた。

### 五月八日

「人生には壁がある。信仰にも壁がある。壁を壁と氣ずかない者もあり、壁を見たゞけて諦める者もあり、壁を破ろうとして破り切れない者も少くはない。君たちは、その壁を破る数少い中の人になつて欲しい」

野口上人の励ましの言葉に、前日来の疲れも忘れ、元気に本立寺の門を出た。

午前中は快調だったが、神戸が近くに従つて車の数も増え、午後の日射は、焼けつくようアスファルトに照り返り、休む場所も見あたらず、ふらつくよう足どりで、神戸市灘区魚崎町の荒牧さんという紳

見寺の総代さんのお宅についた。時間は予定より三時間も遅れていた。

さうそく鳳呂に入れてもらつたが、体を洗うにしても、自分の五体が、自分で自由にならず、今さらのように、

「よく精神力だけで、ここまで来られたものだ」

と思つたことだった。

荒牧さんの奥さんは、丁度身延へ参詣されて留守だったが、御主人が二、三日前から、

「もう来るか、もう来るか」と指折り數えて待機させていたといふ。

御主人をはじめ家族の方々の親切が、身にしみた。

### 五月九日

今日の予定は大阪泊り。荒牧さんが、信仰友達である大阪靈笛寺の総代、木谷さんのお宅へ、電話で連絡をとつて下さった。

元気に神戸より大阪へ向い、大阪では一番にぎやかな千日前を通りぬけたが、街中

の人々は皆、驚異の眼で私達をみていた。

夕刻、生野区の桃谷駅に近い木谷さんの  
お宅についた。御主人は荒牧さんの奥さん  
達と共に、身延に参詣して留守だったが、  
木谷さんの奥さんは、まるで我が子のよう  
に、私達を迎えてくれた。

そして三人のために製服、衣、白衣、そ  
して絞巻までも、それぞれ新調させていた。  
過分な御供養の品々、

△御厚意は有難いが、これほどのものを、  
果して受けるだけの資格があるだろうか  
△自分たちが、どれほどの修行をしたとい  
うのだ△

という反省が先き立った。

五月十日

木谷の奥さんをはじめ御家族の方々、店

員の人たちの親切に感謝しつつ大阪より奈  
良へ向った。

途中、昔から難所といわれ、オイハギが  
出たともいう生駒山の、クラヤミ峠を越ゆ  
る頃、丁度日中の一番暑い時のこととて、  
異状なまでに喉がかわき、足は棒のようだ  
った。

予定より随分おくれて、その日の目的地  
である奈良県大和郡山市の立正靈山会道場  
まで、あと一息という所へさしかかった時  
はるか前方に立正靈山会青年部の人たちが  
七、八名、太鼓をうちながら出迎えている  
姿が眼にうつった。

その姿、その声、そしてその太鼓の響き  
に接した時、今までにない強い、熱い、何  
ものかと心の奥底から、こみあげて来るの  
を覚えた。

純心な子供たち、一昔遊びたい盛りの高校、中学、小学校の子供までが、わざわざ出迎えて、脇見もせず、おくびれもせず、

めいめい一心に太鼓をうち、お題目を唱えている姿には、心から感謝せずにはおれないと同時に、

「この子供たちの心に、こたえなくてはならない」

といふ責任を強く感じた。最早、足の痛みや、体の疲れにこだわってはおられなかつた。そこには迎える者のお題目と、迎えられた。

道場主管の遠山先生は、身延参拝中で留守だったが、その夜は青年部の人たちと共に、行脚道中の話しや、色々な質問に答えて、楽しい一ときをすごした。

身延山の日高上人からは、一通の電報がとゞいていた。電文は次のように打たれていた。

「ワズカバカリノ修行デ、增長スルナカレ。自肅自戒、道念ヲ畜イ起シテ、初一念ヲ貢徴セヨ。道中ノ健斗ヲ祈ル。ヒタカ」

この電文を読んだ時、初めの中は、実は意味がよく判りかねた。三人は鳩首して、正靈山会青年部の方々は、身延山青年行学講習会の度ごとに参加したり、昨年の夏の別動隊関西街頭布教にも積極的に協力していく、みを顔なしめであり、なつかしい限りであった。

から叱り飛ばされるとは、一体、何故だろ

う

と思った。そして何度も何度も読み返す

中、

ワズカバカリノ修行とは、世界宣布の立場に立って、世界地図をひろげてみれば、熊本から身延までの里程は、ほんのワズカバカリの距離にすぎず、行脚もワズカバカリの修行にすぎない

ということ、そして、

増長スルナカレとは、行く先きさきの人との厚意になれたり、知っている人たちの歓待ぶりに気を許してしまって、初一念を忘失するようなことがあってはならない、と強く諭められたものであったのだ

と気付いた時、行脚の初めに

「私も暇が出来れば、許す限り一緒に歩こ

う。そして本当の行脚の作法を教えてあげよう」

とまで言つてくれていた日高上人が、第一期信行道場の指導のため、その暇もなく身延山中、はるかに私たちの修行を案じ、一人一人の心の動きまで、洞察していた樂い思ひやりに、打たれずにはおられなかつた。

### 五月十一日

「午前中、身延に参詣された遠山先生が帰つて来られる」

というので、休養しながら待つていたが先生の帰宅も予定より遅れて、夕方の六時になつた。

どうせ今日も、もう一晩お世話をならせてもううつもりでいたので、別にあわてず

夕食後、

「日蓮宗の青年運動の在り方」

ということを中心にして、色々な意見を開かせてもらったり、また私たちの意見も述べさせてもらったりして、有意義な夜をすごした。

五月十二日

五月十一日といえば日蓮大聖人が、天福元年、十二才にして清澄山へ登り、道善房の室に投じて、名も善日蓮から薬王麻薺と改めた日。

また弘長元年、四十才にして鎌倉の由比ヶ浜より伊豆の伊東へ流罪された日でもあり、越えて文永十一年、五十三才にして身延へ入山さるべく、鎌倉を出発された日である。

五月十二日は、大聖人一代六十一年の生涯において、三度も大きな転換があった御聖日。私たちは七百年の昔を偲び、奉り、心から報恩の読経をした。  
さて出発しようとすると、道場の方々から、「もう一晩……」  
と引き止められた。  
△どうしようか……△  
と、ためらう中、藤森君から、「日の限られた行脚でもなし……」  
などと言い出すので、結局、御厚意に甘えて三泊することにした。

この日は、遠山先生から色々な信仰体験談など拝聴して、たしかに体はやすまつたが、然し精神的には多少ダラケ気味になつたことはかくせなかった。

凡卑に醸してはならない  
と反省しつつも、日高上人の電文がナク  
リテクリと胸をさした。

### 五月十三日

早朝、心機一転、立正靈山会の道場を出  
発。青年部の岩脇さんの案内で、奈良市へ  
向った。一行四名、一段と張りのある行脚  
だった。

奈良市では般若寺町の八田さんという、

立正靈山会の信者さんのお宅で中食を頂き  
二時間ばかり休憩。

これより京都府下、相楽郡の錢司という  
所にある本照寺へ向い、本照寺に着くと同  
時に、物凄い暴雨におそわれた。

朝八時、住職峰村昌宏上人に見送られて  
本照寺を出発、三重県の上野市へ向った。  
途中、道が悪く、連日の如く足が痛む上、  
全身ホコリにまみれた。

お昼すぎ、京都府と三重県の県境にさし  
かかる頃、赤子を背負った若い女性が、私  
たち三人に向って、「身延山の信仰をしていると、不幸になります」と言つた。

思わず対立感情が、グツと湧いたが、先  
きを急ぐ道もあり、たとえ二、三時間、  
相手にしても、聞く耳をもたない創価学会  
の人をので、その場は聞き流して通りすご  
したが、然し墨染めの衣に、身延山と名の  
入った頭陀袋を胸にかけ、三人して太鼓を  
うつて走る私たちに対して、女の身、しか

も山道に一人でいながら堂々と、なお哀れ

暗い気持になつた。

みの口調で以って、そういうことを言つた女性に接した時、こゝまで信徒を仕込んで来た学会教育の徹底ぶりに、むしろ感心せざるを得なかつた。

あたりも薄暗くなる頃、上野市寺町の上

行寺についた。住職田中正司上人に激励され、勇氣を与えて頂いたが、復雜な思いで

床についた。

「若し、今日の日蓮宗に、これだけの真剣

五月十五日

さと熱意があつたならば、おそらく学会の  
ようを、人心をみだす惡質な宗教団体は、  
日蓮門下の中から生れはしなかつたろう

今日もまた、学会員と出あつた。山道で  
喉がかわき、水筒の水もなくなり、見つけた一軒の家で、

「日蓮宗の人々の中で、学会の会員に対し

と水をもらおう

て、自分から雨と向つて「学会の信仰をして  
いると不幸になりますヨ」と注告出来る  
ような勇氣ある人が、果して何人あるだろ  
うか

と声をかけると、出て来た中年の男が創  
価学会員だった。たちまち激論の火花が散  
つた。今日は見のがしは出来ない。相手の  
非を一つ一つ折伏した。

三対一、彼も聽せず堂々と向つて來た。  
何時も受け太刀であったことをかえりみて、

どうも此の地方の支部長でもしているら

しい口ぶりで、教学面も随分と学んではいるが結局、都合の良い所だけを丸暗記しているにすぎない。

少し強く責めると、

「私は学会の者ではないので……」

とか言って、私たちの話しさをそらしてしまひ、一向に聽こうとはしない。そのくせ自分の都合のいいことだけは、まくし立てる。

曾って軍國主義時代の日本の教育、ナチスドイツの教育を、そのまま学会にうつしたような独善ぶりだった。

何時まで議論していくても、同じことをドウドウめぐりするばかり。毒氣深くおかされた学会員をあわれに思い、「法華經の修行は、人の悪口を言わぬこと。一番むつかしい修行は、どんな人でも敬い

どんな人間にも合掌礼拝すること。あんたにこの修行が出来るかネ。出来なければ、出来るまで、この行があんたの宿題。出来るようになつたら、また改めて話をしましよう」

と言ひ残して、その場を去つた。

夕方六時半ごろ、三重県亀山市の照光寺に到着。住職服部雪洋上人のお掛話にあづかった。

## 五月十六日

何時ものように本堂の清掃をすませて照光寺を出発。道中、別に変ったこともなく四日市の富田海岸にある妙延寺に入った。妙延寺は昨年の夏、学生別動隊として泊のお世話になった所。住職三木廉納法尼は、なつかしげにニコニコしながら出迎え

下さった。

夜、檀信徒が私たちの来たことを聞いて、続々と集まって来た。昨年の夏の街頭布教が当地であつただけに、檀信徒も私たちの姿がなつかしきであった。

本堂で一緒に唱題修行をした後、座談会にうつり、体験談などに花が咲き、夜のふけるのも忘れていた。

こゝでは、三木法尼の強盛な信仰に、学ぶべき多くのものがあった。

五月十七日  
妙延寺に別れをつけ、名四国道を名古屋へ向った。

舗装された広い国道は、行けども車の列だけで、何の変化もなく、精神的にも楽ではなかつたが、思ったより早く、名古

屋市内の熱田の本遠寺についた。

本遠寺の法華堂は、つい先日、身延山法主貌下大導師のもとに落慶法要が行われたばかり。

法華堂には、伝教大師開眼と伝えられる立像の釈尊像が安置されている。この釈尊像は、以前、熱田神宮に勧請されていたもの。

熱田神宮は、三種の神器の中のクサナギノツルギを祭っており、日蓮大聖人も京都遊学を終え、伊勢大廟に心願を奏上して上り、立教開宗のため故蘇房州の清澄山へ帰られる途中、この神宮にも参籠されたといふ。

また本遠寺は、昨年の夏、学生別動隊が名古屋街頭布教の際、一泊した所でもあり住職伊藤友情上人は、日高上人と立正大学

時代の旧友、また鷲峰会員身延山大学三年の佐々木友学君のお師匠さんにも当つてゐる。

こうした関係から伊藤上人御夫妻をはじめ寺族の方々から、特別親切にして頂き、五体を疊の上に、思い切りのばすことが出来た。

## 五月十八日

今日の目的地は愛知県刈谷市の身延会道場。こゝは鷲峰会第一期生浜島法立君の実家である。浜島君は、本誌にも「出家の動機」として、「お題目は生きている」

といふ体験談を書き、好評を得たので読者も記憶に新しいこと、思うが、その頃浜島君も、北陸方面へ修行の旅に出ていた。

あいにく彼とはあえをいわけだが、かねて家族の方々とも懇懃であつたため、今日の行脚の行く先きが楽しまれた。  
里程もさほど遠くはない。朝食後、伊藤上人の話がはずみ、本遠寺を出発した時は既に十時をすぎていた。

この日、名古屋と刈谷との道中で、身延山から熊本へ向って、行脚している布教研修所出身の、高田師とあら約束になつた。

△一刻も早くあいたい。顔がみたい。つむる行脚中の話も交わしたい

と、休むことも忘れ、中食もとらず、一路国道一號線（東海道）を刈谷へと進んだ。然し行けども行けども、それらしい僧形の影も見えず、太鼓の音すら聞えない。

午後三時、刈谷の市街を眼前にしながら

「きっと高田師は、別の道を行ったのにち  
がいない」

「ヒヨツトすると浜島君の家で、私たちが  
到着するのを待っているのかも知れない」

などと語りあいながら歩きに歩いたが、  
私たちも、ソイラっかり道を間違えて、五  
キロほど刈谷を通りすぎてしまった。

それでも、どうやら浜島君の道場にたど  
りつき、さっそく高田師の消息をたずね  
ると、

「高田さんは、別の道を歩いて行かれた」  
ということだった。

（あいとい）

と黙つめて歩いて来ただけに、これま  
での疲れが、どっと出た。

刈谷道場は、親友の家のこととて、自分  
の家に帰ったような気分にひたり、洗濯物  
がかわくのを待って、正十二時、道場を出  
発。

豊橋まで行くつもりでいたが、出発した  
時間が時間だけに、岡崎までが、やっとだ  
った。既に太陽は西に没していた。

この日は岡崎市内、祐金町の善立寺にお  
世話になつたが、住職小幡潮蘿上人は三河  
管区の宗務所長をしておられ、昨年の夏、  
別動隊の豊橋、刈谷方面の街頭布教の際、  
ひとかたならぬお世話になつていた。

丁度お寺は普請中であったが、それにも  
かゝわらず親切にして頂き、本当に嬉しか  
った。

小幡上人に見送られて豊橋へ向った。距離にしておよそ三十二キロ。

夕方七時、豊橋市花田町の大法寺についた。住職石橋妙定法尼は、今年身延山大学から立正大学へ転校した薦峰会員石橋隆君の伯母さんに当る人。

こゝも昨年の夏、別動隊として一泊したことがあり、石橋法尼の歓待に、行脚の疲れをいやした。

### 五月二十一日

朝八時、大法寺を出発するに当たり、大法寺の信者さんが、自転車で近道を案内してくれた。一日の行程が、非常に楽になつたのは有難かった。

途中、愛知県と静岡県の県境を越え、浜名湖の風光を楽しみながら、こゝろよい潮

風に吹かれて、足どりも軽く、夕方には浜松市春日町の本蓮寺に到着。住職梅沢貫照上人に出迎えられた。

### 五月二十二日

本蓮寺に別れをつげて掛川へ向う途中、浜松の町はずれで、水をもらいに立ち寄つた所が、普伝院という禅宗の寺だった。

たまたま水を縁に住職の禅僧と、話ををする機会を得、創価学会に対する批判や、現在の仏教そのものに対する在り方などについて語りあつたが、この禅僧が近代的感覺をもつて、今までのものとは全く違う、新しい立場から、新興宗教や既成仏教を批判している、その新しい立場そのものに、学ぶべき多くのものを感することが出来、大いに勉強になった。

然し結論的には、

「日本仏教各宗の中でも日蓮宗の者が、特に青年僧が、大いにハツスルする以外はない」

という自覚をうえつけられたことだった。この日は掛川市橋町の宗心寺、倉元文泰上人のお世話をなった。

### 五月二十三日

宗心寺を出発するに当って、門前に多数の檀信徒の方々が、私たちを激励するため集っていた。

身延山につくまで、あと二日

（連日、長距離の強行軍であるため、今日一べんに四十キロも歩くのは無理だろう）

とは思ったが、

### 五月二十四日

曾って身延山街頭布教でも立ちよったことのある益津の大慶寺に泊った。

大慶寺は、日蓮聖人が京都遊学の途次、掛録された靈場と伝えられ、現在身延山大奥に勤めている大場玄晃上人の実家でもある。

小夜の中山峠を越えて、藤枝市へ入り、

意志で歩いていた。

倉元上人をはじめ檀信徒の方々に、心から感謝しながら、藤枝へ急いだ。身延山もいよいよ間近くなり、一段と足も速くなつた。

身延へ、身延へ、一刻も早く身延へ

といふ一念のみだった。

清水市で夕立ちにあつたが、通りすぎる静岡市にしても清水市にしても、曾って身延山大学在校中、岩間布教部長を陣頭に擧鼓宣令し、獅子吼した懐しい街々だった。海岸にそつて行く中、やがて前方に靈峰富士が見えて来た。感激がグット胸に迫った。

あの富士の麓をすぎれば身延山  
と思ふと、太鼓の響きも自然強くなつて来る。

夕方六時半ごろ、興津の町で望月さんと  
いう信者さんに呼びとめられて、夕食の御供養にあづかった。  
七時すぎ望月さんのお宅を出立、まもなく町はずれの松並木の所から、これまで幾

日も歩きに歩いた東海道とも別れて、甲州街道へ入った。

あたりは、すっかり暗くなり、見知らぬ土地のことゝて、見当もつきかねたが、たずねたずねてやつと遊性寺の門をくぐった。住職は、もと身延山本院生の寮監をしておられた丁名塚玄格上人、お上人の顔を見るなり、なつかしさがこみ上げて來た。檀家総代の方も駆けつけて来、親切な歓迎をうけ、はすむよもやま話して、時間のたつのも忘れていた。

## 五月二十五日

今日は、いよいよ私たち行脚修行の最終日である。案ぜられた夜来の雨もあがり、朝は歩くのに絶好の天気になつた。  
つきせぬ名残りを惜み、再会を約して蓮

性寺を出発したが、

今夜は身延につく

と思うと、何時になく気持もすがすがしい。山肌の新緑が目にしむ。西行峠に立つと、眼下の富士川をへだてゝ間近かに富士山が、神々しいばかりに仰がれた。

甲斐街道は万沢・南部そして身延へと通じるのだが、この道こそ文永十一年五月十六日、日蓮大聖人が身延御入山のため辿られた道、そして昭和三十七年の夏、鷲峰会創立の当初、第一回目の行脚として私たちも通った道である。

一步一步が感激的な歩みだった。万沢の町へ入り、大聖人が休息された靈跡と伝えられる顯本寺の森を左手に伸びながら、興津から五十二キロの道程で南部の町についた時、既に、あたりは薄暗くなっていた。

南部の妙淨寺は、甲斐源氏七代の菩提所波木井実長公の父に当る南部三郎光行公の館跡、甲斐文化の発祥地として知られ、大

聖人御一泊の靈場として有名である。

住職望月倫信上人は、もと身延山経理部長をされたことがあり、私たちも在学中お世話をなったこともあるので、

「妙淨寺に一泊しては……」

と出発の時、丁名塚上人にすすめられてはいたが、はやる心にまかせて、そのまま南部の町を通りすぎた。

日は、とっぷり暮れた。肩からつるした懐中電灯の光を頼りに、一步一步身延に近づいて来る感激を胸に秘め、太鼓をうち、お題目を唱えながら、休みなく童歎天に歩きつづけた。ジャリ道を急いだため、足ははれあがり、感覚も失ったようだった。

夜九時三十分、身延山第一の開門「開会闇」という大扁額のかかった総門が、私たちの行く手に、自動車のヘッドライトにてらされて、大きく、はっきりと映じ出された。

強く、がっかりと、大手をひろげて、私

たちを迎えてくれる総門を見た時、思わず三人とも大声をあげ、手を取りあって泣いた。

それは九州熊本から身延山まで、幾山河、

四十日か歩き通して来た者のみ味あう感動

やがて腹の底から湧き起る大音声のお題  
目と共に総門をくぐった。そしてそのまま  
夜の静かな身延の町を通りぬけ、まっすぐ  
西谷の御廟所へ向った。

シンシンと神氣せまる御廟参道の玉砂利

をふみしめ、御廟塔中の大聖人の尊靈の前にめかずいた時、唱えるお題目の声もふるえ、足の痛みも、今までの労苦も、嘔のようにお先去り、たゞ涙声で一心不乱に、時のたつのも忘れて、お題目を唱えつゝけるばかりであった。

行脚修行無事成満の御礼報告を終えると同時に、小雨が降って來た。三人は、その雨の中に立ち、互に向いあってお題目を三唱した。

声もなく、たゞ顔を見あわせながら、泣くとも笑うともつかぬ気持ちで、その場に坐り、静かに西谷の夜空を仰いだ。

大聖人の息吹きが、今こそソクソクとして五体の隅々までも浸み透って行くのが感ぜられた。

むすび

翌日、本山へ御挨拶を行つた時、岩間布教部長は、我が愛弟子を迎えるよう喜んで、さっそく全校生を集め、行脚報告会を開かれ、夜は学生有志主催の歓迎会、つゞいて驚峰会の総会が開かれた。

かえりみて色々な体験や労苦はあつた。

然し終始一貫するものは、

「おのれに打ち勝つ」

といふことだつた。

「これから布教は、大衆の中に身を投じた自己実践から始まる。然し同時に、今度の行脚ほどの努力をもつて、深く思索すべきことも決して忘れてはならぬ」「

という慰労に代る言葉を頂いたが、肝銘

深い一言であった。

稿をむすぶにあたつて、道中お世話をされた寺院各聖をはじめ寺族の方々、檀信徒の方々、そして一杯の水をめぐんで下つた名も知らぬ多くの人々に、心から感謝し、尽される報恩は、今後における正法宣布にて上つて代えさせて頂きたい、と念ずるものである。



# 身延山青年行学講習会案内

身延山青年行学講習会は、昭和三十七年

上げます。

の三月より毎年春三月と夏八月に開催され

記

これまで前後五回、回を積ねるごとに好評  
を博し、これまでの延べ参加人員は、およ

期間 八月廿六日（水）より廿九日（土）  
まで三泊四日間

そ四百名をこえるに至りました。今度は第  
六回目の講習会です。

会場 身延山西谷祖廟堂経殿  
宿舎 男子 - 西谷清水坊

この講習会は、身延山布教部の主催によ  
るものですが、正しい法華經の信仰、日蓮

女子 - 西谷岸之坊

役員

聖人の教えを讃仰して、その真髓にふれ、

主 任 - 布教部長岩間潔良

以って、かけがえない我が人生、ひいては

家庭、社会、國家、世界全体の正しい在り

副主任 - 布教部主事日高白象

方を開拓しようと思われる方々は、この機

会を開拓しそうと願われる方々は、この機

一、日蓮聖人の教学について

会を開拓しそうと願われる方々は、この機

一、日蓮聖人の教学について

東京身延別院 藤井教雄

一、創価学会の動向について

特命布教師 八須日忍

一、催眠術と信仰心理について

立正大学助教授 望月一靖

一、現代社会と青年運動

講習会主任 岩間湛良

一、本尊と題目について

講習会副主任 日高白象

一、その他 交渉中

年令 十六才より三十九才まで

(但し傍聴自由)

会費 二千円(四日間の宿泊料)

米一升(代金の場合一五〇円)

記念写真代(一一〇円)

携帯品

具、寝巻、着替衣、洗面具、

奥之院登臨用ハキモノ、ウナワ太鼓

その他必要なもの

申込 当日受付

西谷常経殿午前十一時より十二時  
(但し中食をすませて参集のこと)

解散 八月廿九日午後二時三十分の予定

註 八月三十日(日)希望者あれば七面  
山に登詣の予定

行学の二道を勵み候べし

行学絶えなば仏法はあるべからず

我れも致し、人をも教え候へ

行学は信心より起るべく候

力あらば一文一句なりとも  
語らせたもうべし

## 鷲峰贊助会員と

### 身延山金銅釈尊像の写真

本誌発展のため温く御指導 御支援下さ  
います読者皆さまに厚くお礼申上げます。  
特に年間六十人の人々に対し、本誌を見本  
として宣伝寄進する資金として、年間三千  
円を御志納下さいました鷲峰贊助会員の方  
々には、ここに御芳名を御紹介申上げ、謹  
んで衷心より感謝の意を表させて頂きます。

鷲峰贊助会員  
身延町 吉松白耀 名古屋 高桑鋼次  
甲府市 斎藤啓子 福岡市 藤田恵久  
四日市 三木廉純 熊本市 小寺隆円  
豊橋市 石橋妙定 神戸市 奥町妙代

市川市 中島康恩

前承 六月十五日現在

なお身延山鷲峰会としましては、これま  
で御加入下さいました贊助会員には、贊助  
記念として本誌表紙の写真を、四つ切りに  
引き延して一枚ずつ寄贈申上げております。

この釈尊像は、身延山奥之院参道二十五  
丁目の三光堂の露座仏を原型として、寸分  
も違わないものを作製、お釈迦さまが法華  
経を説法されたインドの靈巖山に、近く建  
立される仏舎利塔正面本尊として、身延山  
から渡印すべく、日下身延山祖師堂横の本  
師堂内陣に安置されている国際的な大仏像  
です。

鷲峰発送部

# 地 震 御 見 舞

謹みて、このたびの新潟地  
震による罹災者の方々に心  
からお見舞申上げます。

## 身延山鷲峰会

### 暑中見舞・広告募集

本誌七月号と八月号に「誌上暑中  
見舞」の欄をもうり、申込広告を  
取扱います。〆切は七月十五日  
掲載料は一頁一萬円、二分の一頁  
五千円、以下その割。(但し本誌  
賛助会員は半額)  
なお掲載料は本誌発展の資金とさ  
せて頂きますので、御協力のほど  
お願い申上げます。  
申込みは身延山鷲峰会へ。

## 読者への願い

本誌も本年正月号より有料雑誌として出発しており、ここに半年たちました。この間、身延山鷲峰会学生僧は、ひたすらに日蓮宗青年運動の興隆をめざして、或は休暇ごとに各地方へ身延山布教別動隊として擊鼓宣令、或は本誌の文書伝道に、乏しい学生資金の中、全力をさしだして文字通り死にもの狂いに努力して参りました。おかげさまで、ようやく宗門でも、この運動の真価が認められるようになつて来つゝありますが、これひとえに読者皆さまの御理解ある御協賛のたまものと感謝しています。

但し、創価学会の機關紙に対抗する意味においても、内容の充実に重点をおき、一冊五十円の本誌も、現在単価七十円以上もつき込んでいますので、一層の御支援をお願い申上げます。

一人でも多く贊助会員になって下さいますよう。

一人でも多く本誌の読者を御勧誘下さいますよう なお折込み  
の読者へガキに、購読して下さる知人の方々を御紹介下さい  
一、誌代未納の方や、誌代切れの方には、半年目のお益を機会に、  
その旨お通知申上げますので、誌代の御納入をお願い申上げま  
す。

△發送部△

## 法灯繼承の挨拶



### 日高白象

醒悟園本妙庵は、身延の駅から身延山へ向う途中、バスで五分ほど行った身延町役場の前の、波木井橋といふ停留所から、北の方およそ七丁ほど登った小高い山頂にあります。

こゝは京都深草の鷺峰院元政上人の、草山の清流をくむ本妙日臨上人が修行され、そして自ら舍利をも留められた旧蹟であつて、日蓮宗信行道場生も三十五日の修行中身延山奥之院や七面山と共に、ここまでも参詣することが慣例となつてゐるほど、本化の僧道を護持宣揚して來た身延山の靈蹟であります。

風光は東に富士川、南に波木井川を眼下に眺め、また北には身延山、西には寺平の台地越しに、駿河の峰から七面山の山容までも仰ぎ、御廟所のある西谷の谷あいは正面と云う、展望絶佳な所です。昭和の初期、不慮の火災のため、本妙庵

師当時の建物、及び龐大なる蔵書、遺品を焼失しましたが、時の身延山八十三代法主望月日諦上人の懸命なる督励と、身延山学生を中心とした信徒の惜まざる協力によつて、屋根こそカヤブキから瓦ブキと変りましたが、間取りも元のまゝ復旧し、現在なお本妙臨師が修行された岩穴、法華三昧の対象とされた棹定石、使用された井戸、並に数点の遺墨等々が、そのまま保存されています。

本妙臨師の伝記については、後日、本誌の上でも紹介する機会があると思いますので、今は省略しますが、ともかく日蓮宗の今日の教学大系は、深草元政上人—本妙日臨上人—優陀那院日輝上人の系譜による、とさえいわれているほど本化の教學に深く、戒律に至っては厳しい元政戒律を繼承復興されたほどであり、またそれだけに強い神通力を發揮され、多くの人々を救濟

したという故事が、今なお生きしく伝えられているほどです。

開山本妙日臨上人が、既にかくの如くでありますので、醒悟園本妙庵歴代の住職もまた清廉高潔な学僧ばかりであり、たとえば近くは大正時代の島智良上人、昭和になつては身延山大学教授の室住一妙上人をみても明かであります。

従つて醒悟園本妙庵には、身延山に学ぶ多くの学生が修行に集まり、ここから多くの人材が輩出されました。たとえば池上本門寺の貢首であられる伊藤日定上人も、その一人です。伊藤貢首様の天下に鳴り響いたあの説法弁舌は、実は本妙庵における鍛練のたまものといわれているほどです。

ところが室住教授が本妙庵を退職されて後、さしもの汨駆も無住となり、荒廃が危懼されるようになります。

たまたま本年五月の第一期信行道場中、

七十三名の道場生と共に本妙庵を参拝したことから、はからずも不肖私、五月十一日、身延山總務望月日雄上人の委嘱により、六月一日より本妙庵に居住、法灯を護持継承することとなりました。

私の出家得度の寺は、九州の竹原法難の靈蹟妙覺寺、その開山は久遠成院日親上人で、日親上人と本妙日臨上人とは時代こそ違えども、命日も同じ九月十七日、そして本妙庵復興を命ぜられた望月日諦上人と日雄上人は、法主と總務の違いこそあれ師子の關係にあり、また本妙臨師の法脈の祖である元政上人の院号は、鷲峰会と同じ鷲峰ここに不思議なる宿縁を思わずにおられないものがあります。

本妙庵は人家に遠く水に乏しく、今は不便ではありますが、不便といえば七面山ほどでもなく、修行としては由緒といい伝統といいそして環境といい屈強な靈場です。

幸い身延山鷲峰会の学生僧が、暇あるごとに来園しては全力をあげて復興作業に従事していますが、思うに醒悟園本妙庵の護持は、そのまま本化の僧道の復興の役にはありません。

私は本妙庵を天下の鬼道場とし、再びこの靈蹟から幾多有為なる人材を輩出すべき使命と責任を痛感すると共に、それを生涯の誓願として、本妙庵の法灯護持継承の任に當る御挨拶をいたしたいと思います。

因みに本妙庵参籠修行を希望される方は、僧俗とも何時でも歓迎いたしますが、修行の律法は厳守して頂くことを、今からお断りしておきます。

なお私の身延山布教部勤務は、從来通り変りはありません。

編集後記

鷲峰

六月増大号

昭和三十九年

第一卷第六号  
通巻第十二号

定価 五十円

昭和三十九年五月二十日 印刷

昭和三十九年六月 一日 発行

編集発行人

印刷所 甲府市橋町一八 天野磨写堂

発行所 山梨県身延町久遠寺内

身延山 鷲峰会

電話（身延山）二番・三番  
振替（甲府）二〇九三番

時代半年分 三〇〇円（ $\frac{1}{3}$  本会負担）

一年分 六〇〇円（ $\frac{1}{3}$  本会負担）

賛助会費 一年分三〇〇〇円（分納可）

☆鷲峰会第一期生の沢田・小寺・藤森の三君が五月二十五日、四十六日間歩き通して遂に身延に到着した。三人とも顔は真黒に日焼し、頬は落ち、目ばかりギヨロ／＼していた。然し、すき通ったような美しい瞳だった。☆大へんな労苦であったと思うが、これによつて身延山在校生一同、大いに発奮した。さゝやかな行脚であったかも知れないが、こうした積み重ねが、やがて国を動かし、世界を動かすもとと信じる。

☆紀行文は、これまで本誌に街頭布教の連載が目立つたので思い切り一挙に掲載したこのため「出家の動機」や「信仰相談室」「靈鷲山と身延山」は割愛、次号へ廻した☆編集長の日高上人が六月一日より波木井の旧蹟、醒悟園本妙庵に入られた。今後の僧道復興を読者と共に期待したい。（8）